

方言調査の結果を授業に生かす

— 四日市市水沢地区に焦点を当てて —

余 健*

四日市市水沢地区における遊びことばの豊かさ（地域差や世代差）について隣地面接調査とアンケート調査から多角的に解明し、当地の水沢小学校で授業実践することを通じて、子どもたちに友達や家族、そして地域との絆を再確認し、さらに深めてもらうことを目指している。

キーワード：遊びことばの豊かさ、世代差、地域差、授業実践

1. はじめに

余・山本・鈴木（2005）や余・鈴木（2006）、伊藤・丹保・余（2009）では、方言的な特徴が豊かに残る熊野に焦点をあて、ガロボシ（かっぱ）の民話や日本版のハロウィーンである「タバラシテ（いただきせて）」の行事に関わる生活語彙等を収集し、精神的な世界やことばの持つ豊かさを解明して、子どもたちの生きる力の形成につなげようと、当地の小学校で授業を実践してきた。この流れを受けて、2009年度からは、四日市市内で一番西の鈴鹿山脈の麓に位置し、伊勢茶が特産である四日市市水沢地区に焦点を当て、当地のことばの豊かさの解明とその成果を当地の水沢小学校の授業に生かすことを目指している。本稿では、特に水沢小学校における授業実践との関連で、項目としては遊びことば（選び歌・じゃんけん・組分けジャンの言い方）に焦点を当てて考察を深める。

2. 臨地面接調査とアンケート調査の概要

(2-1) 臨地面接調査

2009年8月26日・27日の両日、三重県四日市市水沢町の水沢小学校で、当地の出身者22名（60代以上）の方に面接調査を行った。この本調査の準備調査として、当地の方言研究者である森 繁年氏や清水正茂先生と清水道子ご夫妻を対象に予備調査を行っている。いずれの調査も水沢小学校校長の坂 正春先生にご同席いただき、調査項目全般に渡って、貴重なご意見をいただき、充実した本調査の項目に仕上げる事ができた。調査項目は、「(1) 遊びことば (2) 生活ことば (3) 動植物のことば (4) 農業語彙（お茶の栽培や稲作関係等の語彙）(5) 観望天気・自然環境のことば」に大別できる。調査者は、

2009年度三重大学教育学部の日本語学演習 方言・語史Ⅰ（前期）の受講者22名である。調査項目「(1) 遊びことばと(5) 観望天気・自然環境のことば」については、後期の日本語学演習 方言・語史Ⅱにおける教材化を目指して、余がデジタルビデオで収録した。

(2-2) アンケート調査

2010年の2月から3月にかけて、組分けジャンケンや選び歌等の遊びことばの言い方（全9項目）について、アンケート調査をお願いし、水沢小学校の保護者の方を中心に41名から回答をいただいた。3章以降では、この内の水沢地区以外での外住歴がない27名（30代～80代）の方を対象にしている**。

3. 四日市市水沢地区の遊びことばの豊かさ

(3-1) 選び歌

選びたいものを歌にあわせて指で指し、最後に指がとまったものを選ぶ遊びがある。石井（2003）では、この歌を「えらび歌」と名付け、全国の大学・短大・専門学校生を対象に調査を行った。これによると、冒頭は、「どれ（どちら）にしようかな」で始まり、それ以下の特徴は表1のⅠからⅤの5つに分類できる、としている。

なお、岡田（2006）の四日市市内における小学生調査（アンケート）では、水沢小学校の6先生のある児童において、以下のような選び歌を確認できる。

ドレニシヨーカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ シオカラトンボ アカトンボ テッポーウツテ バンバンバン モヒトツオマケニ バンバンバン

上記の選び歌には、表1のⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴの各分類における特徴を確認できる。また石井（2003）では、東西

* 三重大学教育学部国語教育

** アンケート調査27名の内訳は、80代2名、70代5名、60代10名、50代3名、40代5名、30代2名である。

対立型、東日本中心型、西日本中心型、全国型、各地散在型の5つの分布が確認できる。代表的なものとして、東西対立型では東日本の「カミサマ」対 西日本の「テンノカミサマ」、東日本中心型では「オスノス」、西日本中心型は「数字類」、全国型は「カキノタネ」、各地散在型では「ギッタンパッコン」類が挙げられている。また、その中でも三重県では「アップップノプノプノカキノタネ」「テッポーウッテバンバンバン」が代表的な語形であり、特に前者の「アップップノプ」は三重県特有の表現であるとされている。

以下では、上述の若年層における全国的な状況を踏まえつつ、岡田（2006）の四日市市における小学生調査（アンケート）の結果と高年層における水沢調査（面接、アンケート）における結果から、垣間見える特徴に焦点を当てる。まず、表2の2009年に行った水沢地区の高

（表1）選び歌の全国分布における代表的な分類一覧（石井 2003）

- I. ～のいうとおり・～に聞けばわかる：～には「てんのかみさま（かみさま）・てんじんさま・うらのかみさま・ほとけさま・じじばば類が入る
- II. 5モーラで意味あり：かきのたね・あぶらむし・ごはんつぶ
- III. 5モーラで意味なし：あべへのべ・なのなのな・けけけけ
- IV. 鉄砲類：鉄砲うってばんばんばん（どんどこしょ・どんどこどん）
- V. 類別：数字類（12345678910等）、ろうそく類（ろうそく一本消えた・立てた）、とんぼ類（あかとんぼ・しろとんぼ・しおからとんぼ等）、豆類（あかまめ・しろまめ・ちゃいろまめ等）、花類（みかんのかわ・ばらはな等）

年層調査においては、22名中5名の人に「ジージーバーバー ドッチニショ」の形式が確認できる。また、その後は、「オーヤノ ユーホニ ショーマイカ」と「コッチニ ショーマイカ」の言い方が2名ずつに確認される。さらに、表3の水沢小学校5年生の保護者をお願いしたアンケート調査の結果においては、No1からNo4の4名の人に「ジージーバーバー ドッチニショ～」の形式を確認できる。表2、3共に、この形式を使用するのは、69歳以上の人であるので、水沢地区における選び歌の伝統的な言い方は、「ジージーバーバー ドッチニショ～」であるといえそうである。

選び歌における「ジジババ」類は前出の石井（2003）の若年層の結果では、秋田・岩手を中心とした東日本に若干、残存しているが、今回、四日市市水沢地区の高年層でもかなり確認されたことを考え合わせると、次のような点を指摘できる。つまり、「3世代同居が当然で、祖父母や両親という年長者の権威がより強かったかつての社会的状況」においては、少なくとも東海・北陸地方を含む全国的にもう少し広い地域でこの「ジジババ」類が盛んに使用されていた可能性を想定し得る。

さらに、石井（2003）の若年層の結果で指摘されていた「アップップノプ」という三重県特有の表現については、表3の80代男性（No1）や70代男性（No2）の回答に、「ジジババ ドッチニショ～」と「～アップップ（ノプー）」の両形式が確認されることから、水沢地区では、かなり昔から「アップップノプ」も使用されていたものと考えられる。表2、3において、80代から40代前半の計8名の人にこの「～アップップ（ノプー）」が確認される段階から、表3のNo21（40歳）、No22（37歳）

（表2）水沢地区高年層・面接調査における選び歌の言い方（2009）

話者	年齢	えらび歌
1	HSM 78	ジージーバーバー ドッチニショ オーヤノ ユーホニ ショーマイカ
2	HTM 75	ジージーバーバー ドッチニショ オーヤノ ユーホニ ショマイカ
3	MMM 73	ジージーバーバー ドッチニショ
4	ETF 72	ジージーバーバー ドッチニショ コッチニ ショーマイカ
5	SKF 69	ジージーバーバー ドッチニショ コッチニ ショーマイカ
6	KMM 75	ドレニシヨーカー カミサマノ ユートーリ
7	STM 75	ドレニシヨーカー カミサマノ ユートーリ
8	KTF 71	ドレニシヨーカー カミサマノ ユートーリ
9	FSF 69	ドレニシヨーカー カミサマノ ユートーリ
10	SMF 66	ドレニシヨーカー カミサマノ ユートーリ
11	SMF 65	ドレニシヨーカー テンノ カミサマノ ユートーリ
12	CMF 72	ドレニシヨーカー アノカミサマノ ユートーリ ユビキッタ
13	TKF 78	テンジンサンノ ユートーリ
14	MMM 73	カミサマノ ユートーリ
15	MKM 72	カミサマノ ユートーリニ ショマイカ
16	MHF 72	ドレニシヨーカー アップップ
17	YSM 74	ドレニシヨーカー
18	MOM 77	無回答
19	HNM 74	無回答
20	TIM 72	無回答
21	KTM 71	無回答
22	HTM 70	無回答

※話者欄は、イニシャルと性別（Mは男性、Fは女性）で表示している。

方言調査の結果を授業に生かす

(表3) 四日市市水沢地区の選び歌の言い方 (アンケート調査の結果、2010)

話者	年齢	えらび歌	
1	M	80	ジジー ババ ドッチニシヨ オヤノユーホーニ ショーマイカ ヨーテモ ワルテモ コッチニシヨ アップップノブー
2	F	72	ジジーバーバー ドッチニシヨ オヤノ ユーホーニ ショマイカ ヨーテモ ワルテモ コッチニシヨ アップップ
3	M	72	ジジ ババ ドウチニ ショーカナ
4	F	69	ジジ バーバー ドレニ ショーカナ
5	M	78	ドレニシヨウカナ カミサマノ ユートーリ
6	M	72	ドレニシヨウカナ カミサマノ ユートーリ
7	F	69	ドチラニ (ドレニ) シヨウカナ カミサマノ ユートーリ
8	F	67	ドレニシヨウカナ カミサマノ ユートーリ
9	F	66	ドレニシヨウカナ カミサマノ ユートーリ
10	F	59	ドレニシヨウカナ カミサマノ ユートーリ テッポーウツテ バンバンバン カキノタネ ローソク イッポン キエタ
11	F	38	ドレニシヨウカナ カミサマノ ユートーリ
12	M	71	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ アップップノブノブノ カキノタネ
13	F	67	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ
14	F	67	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ
15	M	67	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ!
16	F	64	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ アップップノブ
17	M	44	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリニ ショーマイカナ!!
18	F	42	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ
19	F	42	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ アップップノブノブノ カキノタネ
20	M	40	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ
21	F	40	ドチラニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ アップクチクチク アップップ カキノタネ
22	F	37	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノ ユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ
23	F	59	カミサマノユートーリ
24	F	61	ニラミッコシマショー アップップノブ スラッシュ ダルマサンガ コロンダ
25	M	82	無回答
26	M	68	無回答
27	M	59	無回答

※話者欄の「M」は男性を「F」は女性を各々表している

(表4) 四日市市水沢小学校6年生(31名)の選び歌の言い方 (アンケート調査の結果、岡田 2006)

性別	年齢	選 び 歌	性別	年齢	選 び 歌		
1	男	12	ドレニシヨウカナ	17	女	12	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ
2	男	12	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ	18	女	12	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ テッポーウツテ バンバンバン カキノタネ
3	男	12	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ テッポーウツテ バンバンバン カキノタネ ローソクイッポン キエタ	19	女	12	ドレニシヨウカナ カミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ
4	男	12	使用しない	20	女	12	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ ショカラトンボ アカトンボ テッポーウツテ バンバンバン モイチドウツテ バンバンバン
5	男	12	わからない	21	女	12	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ
6	男	11	ドレニシヨウカナ カミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ ショカラトンボ アカトンボ テッポーウツテ バンバンバン	22	女	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ
7	男	11	ドレニシヨウカナ カミサマノユートーリ テッポーウツテ バンバンバン カキノタネ ローソクイッポン キエタ	23	女	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ ケケケノケムシ ブブブノ コブタケンダヨネ
8	男	11	無回答	24	女	11	ドレニシヨウカナ カミサマノユートーリ
9	男	11	無回答	25	女	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ ショカラトンボ アカトンボ テッポーウツテ バンバンバン モヒトツウツテ バンバンバン
10	男	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ ショカラトンボ アカトンボ テッポーウツテ バンバンバン モヒトツウマケニ バンバンバン	26	女	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ テッポーウツテ バンバンバン
11	男	11	使用しない	27	女	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ
12	男	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ テッポーウツテ バンバンバン タイポーウツテ ドンドンドン カキノタネ ローソクイッポン キエタ	28	女	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ テッポーウツテ バンバンバン モイチドウツテ バンバンバン
13	女	12	ドレニシヨウカナ カミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ	29	女	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アッチッチーノ アッチッチーノ カキノタネ
14	女	12	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ テッポーウツテ バンバンバン カキノタネ	30	女	11	ドレニシヨウカナ カミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ
15	女	12	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ アップクチクチク アップクチクチク カキノタネ テッポーウツテ バンバンバン	31	女	11	ドレニシヨウカナ テンノカミサマノユートーリ テッポーウツテ バンバンバン モヒトツウツテ バンバンバン

の人における「アップクチクチク」が確認され始める段階を経て、表4の2006年当時の水沢小6年生、31名中12名に「アップクチクチク」が多く確認される段階に変化してきていることを確認できる。そして、この表4の小学生の段階では「アップップノブ」の使用が確認できない。つまり、三重県特有の表現である「アップップノブ」は、特に水沢地区においては「アップクチクチク」への変化がほぼ完了したものと見てよいだろう。

アップップノブ → アップクチクチク
(水沢80代～40代) (水沢30代以下)

また、表4では、「テッポーウッテバンバン」が31人中13名、「ローソクイッポンキエタ」が3名、「シオカラトンボアカトンボ」が2名に確認され、いずれの形式も水沢では、表2、3の80代から30代の人にほとんど確認されないで、20代以下を中心として新しく生まれた形式といえるだろう。なお、大学・短大・専門学校生を対象にした石井(2003)では、「テッポーウッテバンバン」が宮城・福島県の東北南部から大分周辺の九州まで広く確認され、「ローソク」類や「トンボ」類は、全国で三重県も含め少数散在している。一方、表4で「カキノタネ」は、17名に確認され、表3でNo19(42歳)、21(40歳)、22(37歳)の3名に確認されていることから、40歳前後の人たちが中心的に使い始め、世代が若くなるにつれ、使用が増えるものと想定し得る。「カキノタネ」は、石井(2003)で、全国的に確認できる。

(3-2) ジャンケン

かつては、「ジャンケン」の呼び名として、全国的に多くの方言形が使用されていた。『日本方言辞典 標準語引き』や『現代日本語方言大辞典』には、淡路島や大阪、岐阜、愛知県の「インジャン」類、北関東から志摩地方を含む中部、中・四国の一部まで分布が確認される「チッチッパ」類、名張市や大阪市、奈良県、広島県賀茂郡の「リッシン」類等その他、多数の方言形が挙げられている。また、江畑(1995)では四日市市を含む三重県内で、広く確認される伝統的な方言形として「ジャイケン」が挙げられ、愛知県と三重県の県境にある長島町では、南部を中心に「インランキュー」が伝統的な形式として挙げられている(鏡味1996)。また、NHK放送文化研究所(1995)によると、ジャンケンの最後の部分の言い方について、「～ボン」や「～ポイ」が全国分布するのに対して、「～ホイ」は西日本に多く分布する、との指摘がある。

さて、上記の全国的な状況を踏まえ、水沢地区の状況を確認する。水沢の高年層に対する面接調査では、特徴的な「ジャンケンモッテ・ショ(シ・ホイ)」が22名中、

計8名に確認された(表5)。江畑(1995)によると三重県内では、他に鈴鹿市や久居市でもこの「ジャンケンモッテ～」の使用が確認される。また、三重県以外では、福井県での使用が確認されるため、かつては、この「ジャンケンモッテ～」の形式が少なくとも、三重県の北・中勢地域から、北陸にかけて分布していた可能性がある。

その他の語形は、現在、全国分布型である「ジャンケン・ボン(ポン)」が12名、西日本型である「ジャンケン・ホイ」が7名確認された。岸江(1977)の調査***でも、水沢地区で、前者の「ジャンケン・ポイ」が確認されることから、伝統的にこの形式が多く伝承されてきたようである。なお、岸江(1977)では、水沢地区に隣接した鈴鹿市や四日市市小山田地区、菟野町等の周辺部で多く確認され、当時の水沢地区では報告の無かったジャンケンを意味する「チッケン」(1名)や「チーチッパ」(2名)の語形も、今回の水沢地区高年層調査では確認できた。

27名分(37歳～82歳)の水沢小の保護者をお願いしたアンケート調査においても、世代を問わず、全国分布型である「ジャンケン・ボン(ポン)」の方が西日本型である「ジャンケン・ホイ」より、多く使用されている。また、先の水沢地区高年層の面接調査では、「ジャンケンモッテ・シ」の語形が、1名(72歳女性)に確認されたのに加えて、アンケート調査でも、69歳女性、59歳男性、42歳女性の3名にも確認された。なお、この「ジャンケンモッテ・シ」の「シ」は、(3-3)節で触れる水沢小6年生に確認された組分けじゃんけんの掛け声

(表5) 水沢地区高年層・面接調査における
じゃんけんの言い方(2009)

話者名	年齢	ジャンケン
STM	75	ジャンケンボン(ショ)、ジャンケンモッテショ
KMM	75	ジャンケンボン(ショ)、ジャンケンモッテショ
ETF	72	ジャンケンモッテホイ
MHF	72	ジャンケンモッテシー
MKM	72	ジャンケンショ、ジャンケンモッテショ
FSF	69	ジャンケンモッテホイ(ショ)
SKF	69	ジャンケンモッテホイ
SMF	65	ジャンケンモッテホイ、ジャンケンモッテショ
HSM	78	ジャンケンポイ、チーチッパ
HTM	75	ジャンケンポイ、チーチッパ、チッケン
TKF	78	ジャンケンポイ
MOM	77	ジャンケンホ(ポ)イ
YSM	74	ジャンケンポイ
MMM	73	ジャンケンポイ
MMM	73	ジャンケンパ
CMF	72	ジャンケンホイ
KTF	71	サイショハグージャンケンボン
KTM	71	ジャンケンホ(ポ)イ
HTM	70	ジャンケンポイ
SMF	66	サイショハグージャンケンボン

※話者欄は、イニシャルと性別(Mは男性、Fは女性)で表示している。

*** 現在、ご健在であれば100歳前後の方を対象に方言語彙について、巡見街道(国道306号線)沿いを調査されている。

「グッパー・インジャン・シ」の「シ」として取り込まれた可能性が高い****。

さらに、岡田（2006）による水沢小6年生の結果においては、31名中、25名に「サイショハグー・ジャンケンボン」の使用が確認される。この「サイショワグー」は、2002年の朝日新聞の記事等によると、テレビからの影響によって広がった可能性が高いようである。因みに先の水沢地区高年層の面接調査では2名（71歳女性・66歳女性）、水沢小の保護者へのアンケート調査でも1名（37歳女性）にしか、「サイショワグー」の回答は、確認できなかった。

（3-3）組分けジャンケン

山田（2007）の中で紹介されている松本紳研究室所属（筑波大学図書館情報専門学群）の佐々木千春（2002）が行ったアンケート調査によると、組分けジャンケンの仕方の中では、「グーとパー」を使用する地域が、三重県を含む全国的に広く確認されるのに対して、「グーとチョキ」を使用する地域は、北海道・東京・愛知・岐阜・長野・京都にのみ使用が確認されている。つまり、大きく日本の地理的な中央部に中心的に「グーとチョキ」の使用域が確認され、その周辺部に「グーとパー」の使用域が確認される。この状況に方言圏論を適用すると、中心部の「グーとチョキ」は、より新しい語形で、周辺部の「グーとパー」は、より古い語形であるといえよう。また、「グーとパー」から「グーとチョキ」への変化については、前出の山田（2007）の岐阜県内においても同様に指摘されている。

そして、全国分布や岐阜県と同様に、四日市市内の小学生（5、6年生）を対象にした余・岡田（2008）でも、組分けジャンケンの回答において圏分布が確認された（4章（4-2）節末の授業時配布資料参照）。つまり、四日市市中心部の市街地で「グッピー」（グーチョキ）が多く確認され、市街地以外の郊外では「グッパ〜」（グーパー）類の形式を確認できた。つまり、中心部の市街地における「グッピー」が新しい形式で、郊外の「グッパ〜」類は古い形式と認められる（「グッパ〜」→「グッピー」）。

他方、この項目に関する特に高年層に対する調査は、あまり行われていない。水沢の60代以上の高年層を対象にした面接調査においては、「ほぼ全員（18名/20名）がこのようなジャンケンをしていなかった」との回答であった。あとの2名は、（3-2）節で確認したとおりのジャンケン（ジャンケンモッチシー等）を行い、勝ち負けで別れていたとのことである。また、水沢小の保護者

（表6）水沢地区の組分けジャンケンの言い方（アンケート調査の結果、2010）

話者	性別	年齢	組分けジャンケンの掛け声
1	M	82	無回答
2	M	80	無回答
3	M	78	ジャンケンボン
4	F	72	無回答
5	M	72	無回答
6	M	72	コッチガグーヨ コッチガパーヨ
7	M	71	無回答
8	F	69	無回答
9	F	69	無回答
10	M	68	グーパー
11	F	67	グーノヒトコッチ パーノヒトコッチ
12	F	67	グー トパー
13	F	67	グーパー
14	M	67	無回答
15	F	66	グーチョキパ
16	F	64	無回答
17	F	61	無回答
18	F	59	グーチョキ
19	F	59	無回答
20	M	59	無回答
21	M	44	グー ト パーデ ホイ
22	F	42	グーパージャンケン
23	F	42	グーパーインジャンシィ
24	F	40	グッパージャンケンボン
25	M	40	グーパージャンケンボン
26	F	38	グーパージャンケンボン
27	F	37	ジャンケングーとパー

※話者欄の「M」は男性を「F」は女性を各々表している。

27名を対象にしたアンケート調査の結果は、表6に示されている。まず、7、80代の方は、無回答が7人中5人と多数派になっており、先の水沢の高年層面接調査における結果と共通した結果である。

ついで、5、60代の13名中においては、7名の無回答と6名の組分けジャンケンの呼び方有りの回答（「グーパー」類が4名、「グーチョキ」と「グーチョキパ」が各1名）とが伯仲するようになる。さらに、3、40代の7名に至っては、全員が組分けジャンケンの呼び方有りの回答で、その内、普通のジャンケンと「グーパー」類を組み合わせた「グーパージャンケン」類の回答が5人と多数派を占めている。そして、次の20代以下の若い世代で多数派を占める「グッパージャンケンシィ」****の派生元の語形とも考えられる「グーパーインジャンシィ」が表5のNo23の42歳女性に確認できる。以上の水沢における面接調査とアンケート調査の結果を考え合わせると以下のような組分けジャンケンの変遷を想定し得る。

無回答多数・ジャンケン・モッチ・シー等 (80~70代)	→	グーパー類 (60~50代)
グーパー・ジャンケンボン類 (40~30代)	→	グッパージャンケンシィ (20代以下)

**** その後の水沢小学校と隣接校区の小山田小学校の両校区の保護者における遊びと遊びことばの撮影調査から、水沢地区出身の3名（39歳・40歳・41歳）の女性にアンケート調査では確認されなかった、ジャンケンの掛け声としての「インジャンシ（チ）」が確認された。

***** 2006年の水沢小6年生を対象にしたアンケート調査では31人中25人が「グッパージャンケンシィ」を使用していた。

つまり、20代以下で多く確認されるようになる「グッパー・インジャン・シ」は、水沢地区内において世代間で伝承されてきた方言形である両側の「グッパー」と「シ」とを、同じく水沢地区で40歳前後の人を中心に比較的新しく使用され始めた「インジャンシ」（普通のジャンケン）と、複合させることで生まれてきた新方言形といえるだろう。

次節以降、上記で確認した水沢地区内における世代差や水沢地区を中心として、四日市市内の地域差に見られることばの豊かさ（多様性）を授業に生かしていく。

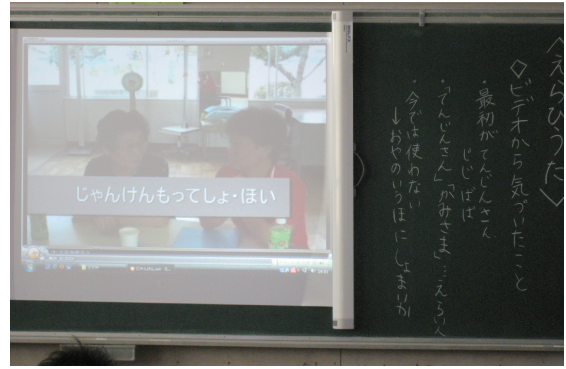
4. 方言調査の結果を授業に生かす

(4-1) 授業実践の概要

余担当の2009年度後期の授業（日本語学演習 語史・方言Ⅱ）の中で、既述の四日市市水沢地区の高年層を対象にした方言調査の結果に基づき、その模様が収録されているビデオ画像の教材化を図ると共に、指導案の作成をグループ毎に進めた。最終的に4グループが、授業の最終日に指導案とビデオ教材のプレゼンテーションを行い、坂正春先生より、現場教育の観点より、有意義なアドバイスをいただいた。その結果、上村千奈津・阪田彩加・森希望・吉田和代（授業当日は不参加）の4名の教育学部生が、水沢小学校5年B組で授業を担当させていただけることになった。なお、水沢小学校の坂正春校長先生のお取次ぎのもと、5年B組の担任である今藤友紀子先生より、クラスを提供いただいた。遊びの項目の中でも「選び歌・ジャンケン・組分けジャンケン」に焦点を当てた指導案は、次節（4-2）に示されている。特にビデオ画像の編集・教材化に関して、編集する側（学生）は、何度も飽きるほど目にしてはいるのに対して、視聴する側（児童）は、初めて目にするもので頭に残りにくい可能性があるため、ビデオ教材（選び歌・じゃんけん・組分けジャンケンの言い方）の各最後にまとめの映像を流すという工夫も行われている。図1は、授業の冒頭の選び歌の箇所、まずは、自分達が普段どのような選び歌を言っているかを出し合ってもらっている様子であ



(図1) 授業実践の様子（選び歌の言い方の確認）



(図2) 授業実践の様子（高年層のジャンケンの言い方の確認）

る。図2は、2つ目のビデオ教材（水沢の高年層のジャンケンの言い方）を流している様子である。普段は、あまり目にしないおじいちゃん、おばあちゃん世代の人たちがしているジャンケン等の映像を食い入るようにみている子ども達の多かったことが印象的である。

実際の授業は、上村が進行担当、阪田が板書担当、森がパソコン担当と分担して進めたこともあり、予行演習時に心配した時間が足りなくなることはなく、むしろ、時間が余った感があった。ただ、最後に生徒に書かせた「今日の授業の感想」を読むと概ね好意的な内容であった。中には、「遊びを体験する時間のところで、（收拾がつかなくなった感が少しあったので）もう少し早く授業に戻りたかった」等の今後の課題とすべき感想も寄せられた。

(4-2) 指導案例 教科 一 国語科 一

第5学年 国語科学習指導案

日時 2010年2月23日 火曜日 第6限目

場所 水沢小学校視聴覚教室

授業者 上村千奈津、阪田彩加、森希望（三重大学教育学部生）

1. 題材 選び歌、じゃんけん、グループ分けじゃんけん
2. 全時間通じてのテーマ
 - ・さまざまな方言に触れることにより、言葉のおもしろさに気づく。
 - ・自分の地域の文化を知り、自分の地域に対する誇りや愛情を持つ。
3. 対象学年 小学校第5学年
4. 指導計画（全3時間）
 - ①「どれにしようかな…」みんなは何て言うだろう？
……………2時間（本時1/2時間）
 - ②いろいろな地域の方言に触れよう……………1時間
5. 目標
 - ・選び歌や、じゃんけんを例に、地域や年齢による言い方の違いに気付く。
 - ・自分たちが使っている言葉の表現とは別の表現があることを知り、またそれ自体にも興味を持つ。

6. 本時の流れ

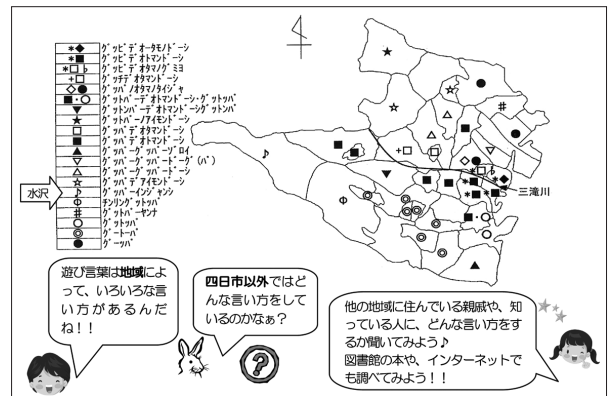
学習活動	時間	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> • 選び歌は、地域によって言い方が異なることに気付く。 	7分	<ul style="list-style-type: none"> • 教師が黒板に文字を書く際に、何色のチョークを使うのかわざと迷い、教室内の児童が言わないであろう選び歌（他県・他地域のもの）を用いて、何色にするか決める。 〈実際に使う選び歌〉 「どれにしようかな 天の神様の言うとおりに ぶっとこいて ぶっとこいて ぶっぶっぶ あぶらむし もひとつおまけに ぶっとこいて ぶっとこいて ぶっぶっぶ。」(滋賀県) • 児童の反応を見る。 • 今日は選び歌についての授業を行うことを伝える。 • 現在児童が使っている言い方を確認する。その際、クラスの皆が同じ言い方をするのか、他の言い方をする児童はいないか問いかける。
<ul style="list-style-type: none"> • 選び歌についてのビデオ教材を見る。 • ビデオについて深めていく。 • 年齢によって言い方が異なることに気づく。 	3分 15分	<ul style="list-style-type: none"> • どんな言い方をしているのか、しっかり聞くように指示をしてからビデオを流す。 • ビデオで実際に使っていた選び歌を文章化したものを黒板に貼る。 →自分たちが普段使っている選び歌との比較をさせる。 • 気付いたことを発表させる。 • 選び歌以外の遊び言葉で、地域や年齢の違いがあるものはないか問いかける。 (予想される児童の意見) じゃんけん、にらめっこ、だるまさんがころんだ、けんけんば、かごめかごめなど。この中から、今回はじゃんけんについて考えることを伝える。 • 子ども達に、普段じゃんけんをする時にどのような声かけをするのかを問いかける。 →隣の人とじゃんけんをするように指示を出し、子どもがどのような声かけをするのか確認する。
<ul style="list-style-type: none"> • じゃんけんについてのビデオを見る。 	5分	<ul style="list-style-type: none"> • どんな言い方をしているのか、しっかり聞くように指示をしてからビデオを流す。 • じゃんけんにおいても、地域差や年齢差があることに気付かせる。また、選び歌だけ地域差や年齢差があるのではないことにも気付かせる。 • ビデオで実際に使っていたじゃんけんを文章化したものを黒板に貼る。 →少し確認をする
<ul style="list-style-type: none"> • グループ分けじゃんけんについてのビデオを見る。 	10分	<ul style="list-style-type: none"> • グループ分けじゃんけんについて、児童がどのような言葉を使うのか確認をする。 • グループ分けじゃんけんについてのビデオを見る。 • ビデオを見た感想を発表させる。 →年齢差に気付かせる。
<ul style="list-style-type: none"> • まとめ 	5分	<ul style="list-style-type: none"> • グループ分けじゃんけんについて資料(下図「四日市市内のグループ分けじゃんけんの言い方」)を配布する。四日市市内ではどのような言い方があるのかを紹介し、自分たちでも調べてみると面白いということ伝える。 • 他地域に住む親戚や知り合いなどに聞いたり、図書館の本やインターネットで調べたりするなど、方法はいろいろあることを伝える。

たものをもとに、他地域の言い方を知る。

- 子どもたちが使う言い方と比較し、似ているところ、違っているところを見つけ出す。
- 〈第3時〉
- 自分たちの使っている言い方は、他ではあまり使われていないことを知る。
 - 地域独自の言葉は、その地域に住む人々が使わなくなると途絶えてしまうことになるので、1つの文化として大切にできるように伝える。(子ども自ら気づいて欲しい)

※授業時配布資料

四日市市内の小学生におけるグループ分けじゃんけんの言い方(余・岡田 2008 に基づき上村が作成)



(4-3) 授業後の反省会

授業実践後、坂 正春校長先生のご配慮で、反省会を開いていただき、多くの水沢小の先生方からも貴重なご意見を伺うことができた。この席で出された主なご意見は次のとおりである。

- (1) 授業を受けている子どもがとっても楽しそうであった。ことば遊びは、あうんの呼吸で友達とつながっている。そして、家族ともつながっているから、「お家でも今日の授業の内容を話してみてね」とか「知っているおじいちゃん、おばあちゃんがいたよ」等の声掛けを最後にしても良かったのでは。
- (2) 方言は地域の古典である。方言を取り上げることで、高齢者や家族とのふれあいが高まるし、方言を1つの切り口としたコミュニティスクールを開くことも可能ではないか。
- (3) お父さん・お母さん世代のビデオ映像もあつたら、もっと良かった。
- (4) 子ども達は、ことばに地域差があることは、既に気付いていることではないか。そこからさらに、「どうしてそのような地域差が生じるのか」という点について、授業時配布資料をもっと使って、普段の生活との関わりの中から考えさせるべきではなかったか。
- (5) 各ビデオ教材を見せて、何を感じさせたかったのかをもう少し明確化すべきではないか。

全体の流れ

〈第2時本時〉

- 選び歌とじゃんけんについて、子どもたちが調べてき

(6) もう少し活動できる時間が取れたら、よかった。

5. まとめと今後の課題

- (1) 選り歌について、水沢地区における選り歌の伝統的な言い方は、「ジージーバーバー ドッチニショ〜」である。その背後には、「3 世代同居が当然で、祖母や両親という年長者の権威がより強かったかつての社会的状況」も読み取れる。「選り歌や他の手まり歌等の遊び歌には、その当時の社会的状況（戦時中なら軍歌的な内容等）が反映され得る」ともいえよう。また、三重県特有の選り歌の表現である「アップアップ」は、水沢では、80 代から 40 代の人が多く使用しているが、30 代以下では「アップクチック」へ変化が完了しているといえそうだ。
- (2) ジャンケン（掛け声）について、水沢地区では世代を問わず、「ジャンケン・ポン（ポイ）」の全国分布型を使用する人が多い。水沢小の 6 年生の大部分は、「サイショハグー・ジャンケン・ポン」を使用する。冒頭の「サイショハグー」は、テレビからの影響と考えられる。
- (3) 組分けジャンケン特有な言い方である「グーパー」類は、水沢においては、60 代から派生したようである。水沢の 20 代以下で多く使用されている「グッパー・インジャン・シ」は、水沢地区内において世代間で伝承されてきた方言形である両側の「グッパー」と「シ」とを、同じく水沢地区で 40 歳前後の人を中心に比較的新しく使用され始めた「インジャンシ」と複合させることで、生まれた新方言形といえるだろう。全国的にも、岐阜・愛知そして四日市市においても共通して、グーチョキを表す「グッピ」類よりも「グッパー」類の方が周圈的に確認されるため、より伝統的な形式といえる。
- (4) 上記のことばの世代差や地域差にみられることばの豊かさに着目し作成したビデオ教材を使用して、方言調査地である水沢地区の小学校 5 年生を対象に、授業を実践した。「遊びにまつわることば」ということで、子供たちの関心を引きやすい題材ではあるが、特に遊びの実演時に取捨がつかなくなる危険性もあることがわかった。今回はひとまず、地域の遊びことばについて、わかりやすく確認することに主眼を置いたため、そこから、「そのような地域差や世代差がなぜ生じるのか」や「ことばは友達や家族等の周囲の人たちとつながっている」ことをもっと実感してもらえようような深める方向への検討が浅かったように思われる。いずれも次回の授業実践に向けての今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 1) 余 健・山本真吾・鈴木幹夫「熊野の精神的世界の豊かさを教材にする」『三重大学教育実践総合センター紀要』25 号 2005
 - 2) 余 健・鈴木幹夫「熊野の遊びことばの豊かさを教材にする」『三重大学教育実践総合センター紀要』26 号 2006
 - 3) 伊藤隆司・丹保健一・余 健・鈴木幹夫『世界遺産熊野地域の言語表現の豊かさを解明と教材開発』平成 18～20 年度 科学研究費研究成果報告書 2009
 - 4) 石井聖乃（2003）『えらび歌の地域差に関する調査研究』（東京女子大学卒業論文要旨）
 - 5) 岡田愛弓『四日市市における遊び言葉の地域差』三重大学教育学部卒業論文 2006
 - 6) 江畑哲夫『三重県方言民族集覧 1～6』私家版 1995
 - 7) 鏡味明克「木曾三川地域における平野部の学区と方言分布」『名古屋方言研究会会報』第 13 号 1996
 - 8) NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』2 月号 1995
 - 9) 岸江信介『鈴鹿巡見街道方言地図集 — 鈴鹿山麓北伊勢地域方言の方言地理学的研究 —』私家版 1977
 - 10) 朝日新聞・夕刊『あなたの謎とき隊』9 月 25 日付 3 ページ 2002
 - 11) 山田敏弘（編）『ぎふ・ことばの研究ノート』第 6 集 岐阜大学教育学部国語教育講座 2007
 - 12) 余 健・岡田愛弓「四日市市における遊びことばの分布 — 若年層千人調査から —」『方言研究の前衛』山口幸洋博士古希記念論文集 2008
- 朝日新聞・夕刊『ジャンケンするとき「インジャンホイ」と言いますか』4 月 4 日 2 ページ 2007
- 井上史雄『日本語は年速一キロで動く』講談社 2003
- 真田信治『方言の地図 言葉の旅』講談社 2002
- 清水 武『望郷 ふるさとと歴史 水沢の歴史とことばなし』水沢郷土史研究会 2004
- 清水正茂『わが愛する郷土 水沢の今と昔 ～実践を通して見てきた生活（生産活動）の姿～ 地域・水沢を見つめ直す機会に』私家版 2006
- 森 繁年『方言と水沢の言葉』私家版 2007
- 四日市市『四日市市史編さん調査報告第 4 集 水沢三本松町の民俗』1993

謝 辞

当時、四日市市教育委員会の倉田浩子先生（現在、大谷台小学校）を始めとする先生方には、水沢小学校校長の坂 正春先生をご紹介くださり、また授業実践後の反省会では貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございます

方言調査の結果を授業に生かす

いました。そして、予備調査から本調査、アンケート調査、授業実践等で、大変お世話になりました坂 正春校長先生を始めとする水沢小学校の先生方に厚く御礼申し上げます。また、予備調査や電話での確認調査等で、水沢地区のことばの特徴についていろいろとお教えくださ

た森 繁年氏や清水正茂先生と清水道子ご夫妻にも同様に心より感謝申し上げます。さらには、水沢白寿会のみなさまや水沢小学校の保護者のみなさまには、水沢地区のことばの特徴について、ご親切にお教えくださり、本当にありがとうございました。